

館野前遺跡

TATENOMAE SITE

—寺院建設に伴う緊急発掘調査報告書—

2011.8

宗教法人 長善寺
盛岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、岩手県盛岡市上飯岡15地割に所在する館野前遺跡において、宗教法人 長善寺が行った寺院建設に伴い平成22年8月2日～5日、9月1日～10月28日にかけて実施した発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、宗教法人 長善寺と盛岡市教育委員会との間に締結された協定書に基づき、遺跡の学び館が野外調査および出土資料整理・報告書編集を行った。また、本調査に係る費用は、事業主体である宗教法人 長善寺より支出された。
3. 本書の執筆編集は、盛岡市遺跡の学び館 佐々木亮二が担当した。
4. 遺構平面位置は世界測地系を用い、公共座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。
館野前遺跡 調査座標原点 X-36,000・Y+23,000
5. 高さは標高値をそのまま使用している。
6. 遺構記号は次のとおりである。

遺 構	記 号	遺 構	記 号	遺 構	記 号
竪穴住居跡	RA	柱列跡	RC	竪穴跡	RE
獨立柱建物跡	RB	土坑	RD	溝跡	RG

7. 調査および整理作業には、次の方々の協力を得た。(五十音順、敬称略)

【発掘調査・室内整理作業】

阿部正幸、犬沼芳子、長内理志、富塚和男、川村久美子、熊谷あさ子、小林勢了、小松愛子、佐藤和子、佐藤美智子、佐藤理志、竹花榮子、谷藤貴子、千葉留里子、袴田英治、口野杉節子

【助言・協力】

岩手県教育委員会、宗教法人長善寺、長善寺護持会

8. 発掘調査に伴う出土遺物および記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。

目 次

例 言

目 次

挿図目次

写真図版目次

I 遺跡の環境	1
II 調査内容	4
III 総括	32

挿 図 目 次

第1図 館野前遺跡位置図	1
第2図 館野前遺跡全体図	3
第3図 館野前遺跡第1次調査区全体図	5
第4図 R A001竪穴住居跡	8
第5図 R A002竪穴住居跡	9
第6図 R A003竪穴住居跡	10
第7図 R A004竪穴住居跡	11
第8図 R A005竪穴住居跡	12
第9図 R A001・002竪穴住居跡出土遺物	13
第10図 R A002・003竪穴住居跡出土遺物	14
第11図 R A004竪穴住居跡出土遺物	15
第12図 R A005竪穴住居跡出土遺物	16
第13図 R B001掘立柱建物跡、R C001柱列跡	17
第14図 R D001～009土坑	21
第15図 R D010～015土坑	22
第16図 R G001溝跡	24
第17図 R G002・003・004溝跡	25
第18図 R X001池状遺構	26
第19図 R X001池状遺構、R G004溝跡、遺構外出土遺物	27
第20図 第1次調査区ビット断面図	29
第21図 長善寺経塚平面図	30
第22図 長善寺経塚出土一文字石経	31

写真図版目次

- 第1図版 調査区全景（北から）、調査区全景（東から）
第2図版 RA001・002竪穴住居跡
第3図版 RA003・004竪穴住居跡
第4図版 RA005竪穴住居跡、RX001池状遺構
第5図版 館野前遺跡出土 土器群、館野前遺跡出土 燧管・古鏡・砥石
第6図版 長善寺経塚全景（南から）、長善寺経塚出土 一字一石経

○遺物の表現について

- (1) 土器……土器の区分は、土師器・あかやき土器・須恵器に大別した。
a 土器の実測図・拓本の縮小率は1/3とした。
b 挿図の土器の配列は器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
c 土師器の黒色処理や彩色されたものは、網目（スクリーントーン）で表現した。

(2) 銅製品

- a 縮小率を1/2として器種ごとにまとめて配列した。

(3) 石製品

- a 縮小率を1/2とした。

(4) 経石

- a 縮小率を1/2とし、妙法蓮華経に出現する順番で配列した。

(5) 挿図中の記号番号は、遺物の出土地点及び出土層位を表している。

〔例〕 RA001A層 → RA001竪穴住居跡A層より出土

〔例〕 G6-A20 IIIa層

↓ ↓ ↓
※1 ※2 ※3

※1 大グリッド……遺跡の余体を50mメッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東にA・B・C……のアルファベット、北から南には1・2・3……のアラビア数字を付し、A6、C12など、両方の組み合わせでグリッド名を表した。

※2 小グリッド……大グリッドの中をさらに2mメッシュで区切り、北西隅を起点として西から東にA～Yのアルファベット、北から南に1～25のアラビア数字を付し、グリッド名は両方の組み合わせで表した。

※3 遺物の出土層位を示す。

○遺構の表現について

各遺構の平面図で、複数の遺構を同一図面に表示する場合、説明する遺構は実線で表し、重複遺構は一点鎖線で表し、掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。

土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。層相の観察にあたっては『新版標準土色誌』（1994小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

I. 遺跡の環境

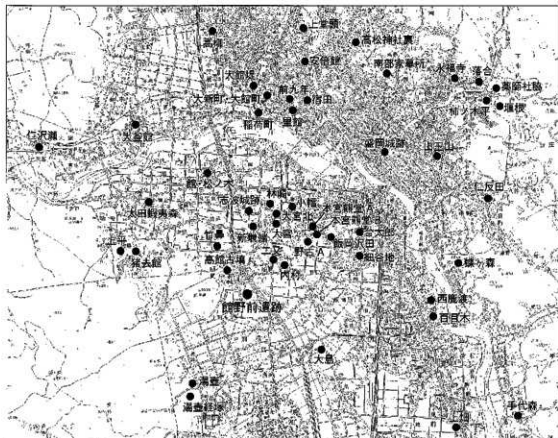
1. 地理的環境

遺跡の位置 館野前遺跡は、盛岡市街地より南西約3kmの上飯岡15地割に所在する(第1図)。遺跡の範囲は南北300m、東西150mと推定され、現況は宅地および田畑である(第2図)。

地形・地質 盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山(2,038m)を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地質・地形に大きく影響を及ぼしている。

碓石川は奥羽山脈より東流し、その流れは鳥泊山と箱ヶ森に挟まれた北の浦(市内上太田)で急激に狭められ、その狹窄部を抜けて北上川と合流する。碓石川はこれまでに何度も流路を変えており、碓石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。館野前遺跡はその沖積段丘上に立地している。

この沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上層に水成シルト、さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりでなく、微高地上にも堆積している。これは沖積段丘が、河道の定まらない碓石川の下割が両辺山地からもたらす砂礫やシルトによって形成され、何度も堆積が繰り返されたことによるものである。碓石川の上割は幾筋も確認されており、大きなものは4条、そのほかにも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。それらに囲まれた微高地上に遺跡が点在している。



第1図 館野前遺跡位置図(1:50,000)

2. 歴史的環境

周辺の遺跡 平石川南岸の沖積段丘は市内本宮・太田・飯岡地区から矢巾町まで広がっており、数多くの遺跡が立地する。これまで縄文時代の遺物は少量発見されるものの、竪穴住居跡等の遺構の発見は少なかった。しかし、近年、露南開発事業にともなう調査によって本宮熊蓋A・B遺跡などで縄文時代晩期の竪穴住居跡が発見されるなど、次第に集落の様相がはっきりと見えてきた。弥生時代については遺物が少量発見されるものの、明確な遺構の検出はされていない。古墳時代の遺構・遺物も発見は少ないが、竹鼻遺跡で古墳時代末の竪穴住居跡が確認されている。

古代 奈良時代になると周辺の遺跡数は飛躍的に増加する。本遺跡北西の飯岡山東麓には終末期古墳の高館古墳群が、北西約3kmのところには太田隈栗森古墳群が築造され、台太郎遺跡、野古A遺跡、百日本遺跡、西鹿渡遺跡などで竪穴住居跡が増加する。平安時代（9世紀）になると志波城（803年）が造営され、この地域にも律令国家の支配が及ぶ。しかし、志波城は北側を流れる平石川の度重なる水害のために、10年あまりでその機能を徳丹城（矢巾町）に移動させる。やがて、その徳丹城も9世紀中葉にはその機能が停止し、律令国家の拠点は鎮守府田沢城（奥州市）に集約されるが、周辺に竪穴住居を主体とする集落はさらに増加する傾向にある。台太郎遺跡では600棟を越す竪穴住居跡が発見されており、当時のこの地域（志波）の最大集落であったと考えられる。また、9世紀後半～10世紀前半になると地域の拠点的な集落が出現し始める。志波城の北東の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幡遺跡では規模の大きい官能的な建物群が造られた集落が発見されており、在地有力者の拠点と考えられる。

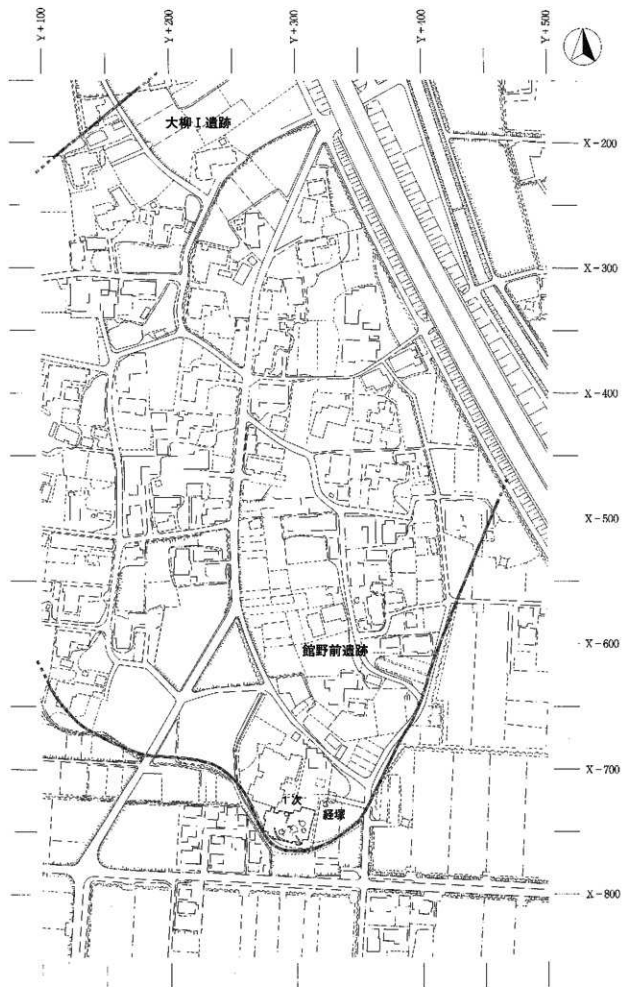
10世紀後半から12世紀までの遺跡はひじょうに少ないが、大新町遺跡や上堂頭遺跡、高松神社裏遺跡では10世紀後半頃の掘立柱建物や竪穴と土器が出土している。12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は聖蹟遺跡や船荷町遺跡で確認されている。また、平泉藤原氏の影響下にあったと考えられる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経家が築かれるようになり、内村遺跡では経家に属したとみられる常滑の大甕が出土しているほか、湯殿経家からは常滑の三筋文甕、一本松経家からは瀧美の甕が発見されている。大宮遺跡では大溝から12世紀～13世紀のかわらけが出土している。

中世 鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、新波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のものであると考えられている。これらの城館跡は丘腹や山頂など見晴らしのいい場所だけでなく、平野部の微高地などにも多数築かれている。館野前遺跡周辺では、西側に位置する飯岡山の麓に、戦国時代にこの地を治め、長善寺の創基でもある飯岡氏が居住した飯岡館が存在する。

近世 現在の城下の町並みの形成は、南部氏の盛岡城築城から始まる。

九戸合戦終結後の天正19年（1591）、南部信直は帰還する豊臣軍の軍監浅野長政から不束方城において、この不束方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている（『私清私記』）。その後、慶長3年（1598）より盛岡城の築城は始まり、寛永10年（1633）に一応の完成をみる。石垣補修に係る発掘調査により、盛岡城は1～5期の変遷を経て現在に至っていることが判明している。

盛岡城は当初の基本的縄張りには浅野長政が関わり、実際の築城工事には旧出利家の家臣内堀伊弉式が奉行並として参画していたことから、戦国期の北奥地域の城郭とは大きく異なり、総石垣の豊臣系城郭として国内最北の事例となっている。



第2図 館野前遺跡全体図 (1:3,000)

II. 調査内容

1. 平成22年度の調査

調査経過 今年度の調査は、宗教法人長善寺より位牌堂および庫裡の改築を希望する旨の事前協議があり、発掘届が提出された。調査対象範囲は建築範囲の全域にわたり、協議を受けて平成22年7月14日にトレンチによる試掘調査を行った。その結果、平安時代の竪穴住居跡や溝跡、柱穴が確認され、工事着手前の緊急発掘調査が必要となった。また、改築に伴い忠霊塔を山門近くに移設させる必要が生じたため、先行して掘削工事を行っている際に礫石経塚が発見され、調査対象範囲外であったが対象範囲に含めた。本調査は施工主である宗教法人長善寺と協定書を締結し、盛岡市教育委員会が行った。調査期間は平成22年8月2日～8月5日、9月1日～10月26日で、調査面積は924㎡である。

2. 遺構の検出状況

第1次調査区は遺跡内の最南端に位置し、西から東にかけての緩やかな斜面となっており、標高依は128m前後である。遺構は黄褐色シルト層上面で検出した。

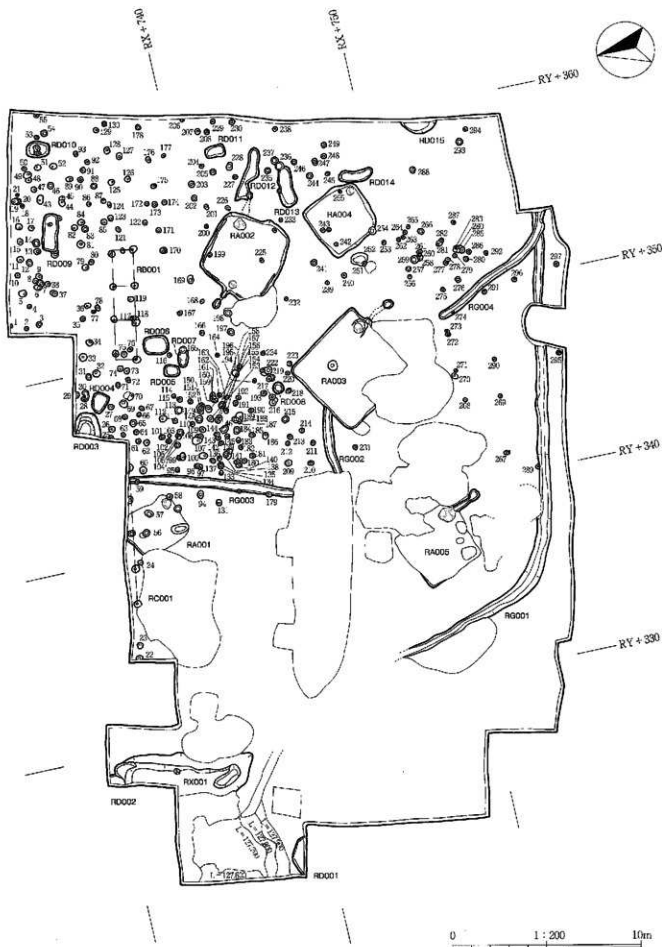
検出遺構 確認された遺構は、平安時代の竪穴住居跡5棟、近世以降の土坑15基、溝跡4条、柱穴約300口、池状遺構1基、礫石経塚1基である。

3. 平安時代の遺構

RA001竪穴住居跡（第4図）

位置	調査区中央北端	平面形	長方形	主軸方向	不明	重複関係	なし
規模	東西2.55m×南北壁3.05m	掘込面	削平	検出面	黄褐色シルト層上面		
埋土	後世の削平によりほとんど残存していないが、床面直上の八層が黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に微量含む。						
壁の狀態	検出面から床面までの深さは0.04～0.05mで、外傾して立ち上がる。北西壁のみ僅かに残存する。						
床の狀態	床面はほぼ平らである。構築土（L層）は黒褐色土を主体に、黄褐色シルトと暗褐色シルトを粒～塊状に少量含む。厚さは0.04～0.36mをはかる。						
カマド	削平されている。火床面のみ残存。火床面は0.50×0.53m以上の不整形円形で、厚さは0.1mである。						
柱穴	床面から2口のビットを検出した。各ビットの深さは、P1-0.14m・P2-0.36m。						
出土遺物（第9図1）	1は土師器の坏である。内面に黒色処理・ヘラミガキが施され、底部は回転糸切り無調整である。						





第3図 館野前遺跡第1次調査区全体図

RA002竪穴住居跡 (第5図)

位置	調査区東隅	平面形	台形	主軸方向	新N47°W、旧N117°E	重複関係	なし
規模	北西—南東4.4m×南西—北東4.0m	掘込面	削平	検出面	黄褐色シルト層上面		
埋土	自然堆積による。A～C層に大別される。 A層—黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを微量に含む。 B層—黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトと黒褐色土を微～少量含む。2層に細別される。 C層—黒色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを少～多量含む。3層に細別される。						
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.25～0.32mで、外傾して立ち上がる。						
床の状態	床面はほぼ平坦である。東側側と北側・西側の一部に、幅0.06～0.09m、深さ0.02～0.05mの局溝がめぐらる。構築土(L層)は黒褐色土を主体に、粒～塊状の明黄褐色シルトを多量に含む、厚さは0.01～0.12mである。						
カマド	カマドは新旧二つある。旧カマドは南東壁北側に構築され、煙道平面形は割り貫きのトンネル状で、断面は楕円形を呈する。天井部分は残存しており、燃焼部から0.40m程の地点で最も深くなり、煙出しに向かってほぼ平坦に続く。規模は、煙出し先端までの長さ1.20m、幅0.16m～0.34m、検出面から底面までの深さは0.49mをはかる。煙出しの埋土中には、破壊された須恵器大甕(第9図8)が詰め込まれていた。 新カマドは北西壁中央に位置する。旧カマドと同様に割り貫きのトンネル状であるが、天井の大部分は崩落しており、溝状の平面形を呈する。燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下がっている。規模は、煙出し先端までの長さ1.02m、幅0.22m～0.37m、検出面から底面までの深さは0.26mである。煙道中央付近の底面から須恵器杯(第9図2)が出土している。						
燃焼部	新旧カマド共に基底部は残存しておらず、火床面のみが残されている。旧カマドの火床面は0.60×0.66mの不整形に検出し、浸透層の厚さは0.08mである。新カマドの火床面は0.48×0.50mの不整形に検出し、浸透層の厚さは0.04mを測る。カマド崩壊土(J層)は黒褐色土を主体とし粒～塊状の黄褐色土を多量に含む。						
柱穴	床面から1口のピットを検出した。深さは0.13mである。						
出土遺物(第9図2～8、第10図9・10)	2～7はいずれも須恵器の坏で、底部は回転糸切無調整である。8は須恵器人甕である。外面に平行文、内面に青海波文と平行文が施される。胴部下半には須恵器片が融着している。9・10は土師器の甕である。9は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。10は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヘラナデ、内面にヘラナデ・ヘラミガキが施される。						

RA003竪穴住居跡 (第6図)

位置	調査区中央部	平面形	方形	主軸方向	S28°E	重複関係	なし
規模	東西壁4.52m×南北壁4.65m	掘込面	削平	検出面	黄褐色シルト層上面		
埋土	後世の削平によりほとんど残存していないが、A～B層に大別される。 A層—黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを微量含む。 B層—黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを微量含む。						
壁の状態	削平によりほとんど残存しておらず、検出面から床面までの深さは0.02～0.1mである。						
床の状態	床面はほぼ平坦である。構築土(L層)は部分的にみられ、黒褐色土を主体に塊状の黄褐色シルトを少						

量含み、厚さは0.02~0.08mである。

カマド 南東半北側に構築され、煙道平面形は斜り貫きのトンネル状で、断面は楕円形を呈する。天井部分が残存しており、燃焼部から煙道中央部にかけて下がり、煙出しに向かって緩やかに上がる。規模は、煙出し先端までの長さ1.98m、幅0.14m~0.3m、検出面から底面までの深さは0.37mをはかる。煙道内から燃焼部にかけてカマド崩壊土（J層）が堆積している。J1層は黄褐色シルトを主体とし、粒状の黒褐色土を微量と塊状の赤褐色シルトを少量含む。J2層は橙色シルトを主体とし、塊状の恒暗褐色シルトを少量含む、J3層は黒褐色シルトを主体とし、粒状の黒褐色シルトを黒色土を多量に、粒状の赤褐色シルトを微量含む。

燃焼部 カマド基底部は残存していないが、床面が浅く掘り込まれている。火床面は0.52×0.55mの不整形に検出し、浸透層の厚さは0.08mである。

柱穴 床面から1口のビットを検出した。深さは0.2mである。

出土遺物 (第10図11~25) 11~16はいずれも須恵器である。16は底部がほとんど残存していないため不明だが、それ以外は回転糸切無調整である。12は内面底部に付着物がある。15は外傾し直線的に立ち上がるが、それ以外は体部下下がやや膨らみ立ち上がる。17~24はあかやきの坏で、いずれも底部は回転糸切り無調整である。17~20・22は体部下半に膨らみを持ち、21・23・24は外傾し直線的に立ち上がる。25はあかやきの甕である。口縁部はゆるやかに外傾し、胴部上半に膨らみを持つ。

RA004竪穴住居跡（第7図）

位置 調査区東側 **平面形** 不整形 **主軸方向** N26°W **重複関係** なし

規模 東西幅3.17m×南北壁3.2m **掘込面** 削平 **検出面** 黄褐色シルト層上面

埋土 自然堆積による。A~B層に大別される。

A層—黒褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを微量含む。2層に細別される。

B層—黒褐色土を主体とし、塊状の黄褐色シルトを少量含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.1~0.16mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 床面はほぼ平坦である。構築土（L層）は黒褐色土を主体に、粒—塊状の明黄褐色シルトを少量含む、厚さは0.01~0.1mをはかる。

カマド 煙道・煙出しは検出されなかった。

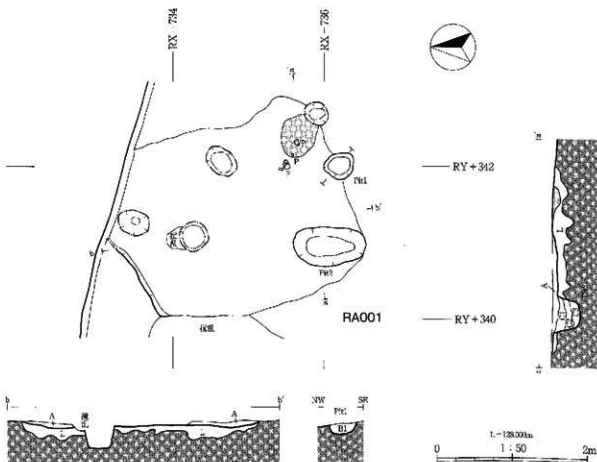
燃焼部 基底部は残存せず、南東半側に火床面のみが残されている。火床面は0.42×0.46mの不整形に検出し、浸透層の厚さは0.08mである。

柱穴 床面から1口のビットを検出した。深さは0.18mである。

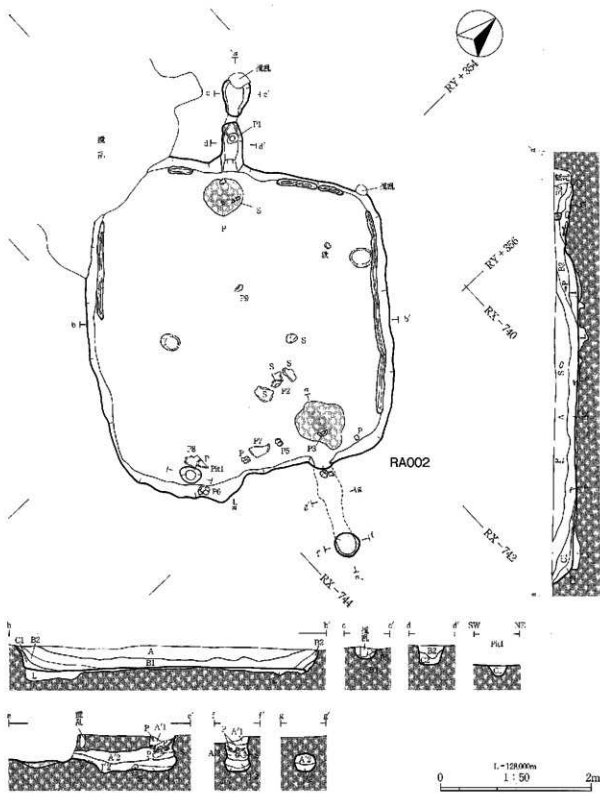
出土遺物 (第11図26~38) 26~33はあかやきの坏で、いずれも底部が回転糸切無調整である。29・32・33は体部下半に膨らみを持つが、それ以外は外傾してやや直線的に立ち上がる。31は径が底部付近で急に小さくなる。32は底径が小さく、4.8cmを測る。34は土師器の坏で、内面黒色処理後ヘラミガキが施される。底部は回転糸切り無調整で、体部下半に膨らみを持ち立ち上がる。35は短い頸部を持つ須恵器の壺である。内面にはカキメがみられる。36・37はあかやきの甕である。外面ヘラケズリ後にロクロ調整、37は内面にヘラナアが施される。口縁部は外反し、胴部中央に最大径を持つ。38は土師器の甕である。口縁部は内外面ヨコナア、胴部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナア後にヘラケズリが施される。胴部が緩く膨らみ、胴部上半に最大径を持つ。

RA005竪穴住居跡 (第8図)

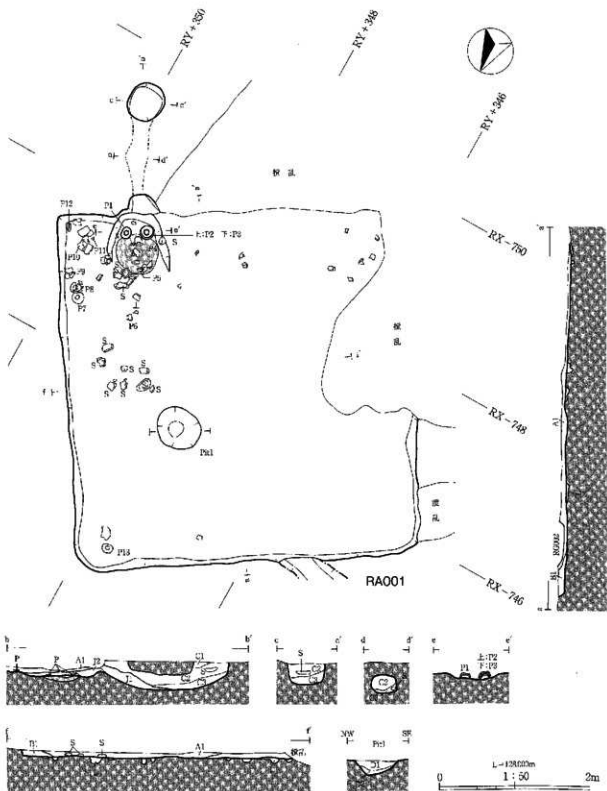
位置	調査区中央部	平面形	台形	主軸方向	N20°W	重複関係	なし
規模	東西3.4m×南北3.78m	掘込面	削平	検出面	黄褐色シルト層上面		
埋土	後世の削平によりほとんど残存していないが、A層は黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に少量含む。						
壁の状態	削平によりほとんど残存しておらず、検山面から床面までの深さは0.02~0.1mである。						
床の状態	床面はほぼ平坦である。構築土 (L層) は部分的にみられ、黒褐色土を主体に塊状の黄褐色シルトを多量含む、厚さは0.02~0.05mである。						
カマド	南壁東側に構築され、煙道平面形は溝状である。燃焼部から煙道中央部にかけて下がり、煙出しに向かって緩やかに上がる。規模は、煙出し先端までの長さ1.56m、幅0.16m~0.28m、検出面から底面までの深さは0.22mをはかる。煙道内にはカマド崩壊土 (J層) が堆積している。J1層は黒褐色土を主体とし、少量の焼土を含む。J2層は暗褐色砂土を主体とし、焼土を微量と、粒~塊状の黒色土を多量に含む。						
燃焼部	カマド基底部は残存していない。火床面は0.76×0.92mの不整形で、浸透層の厚さは0.15mである。						
柱穴	床面から1口のピットを検出した。深さは0.11mである。						
出土遺物 (第12圖39~42)	39は須志器の坏で、底部は手持ちヘラケズリ調整されている。40・41はあかやきの坏である。40は器高が高く7.1cmをはかる。42は須志器の大甕で、平行タタキ目が施される。						



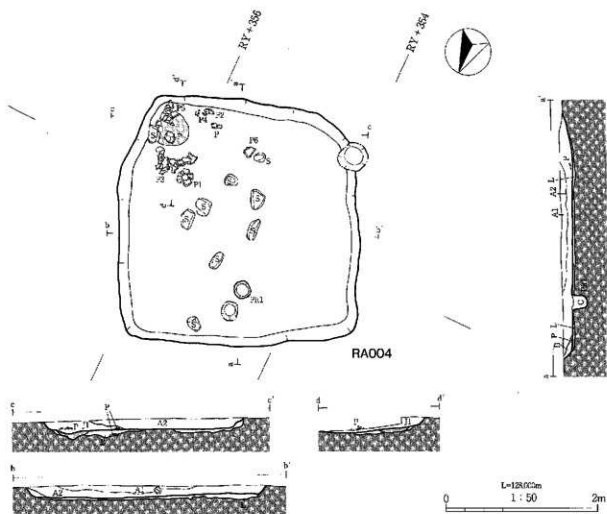
第4図 RA001竪穴住居跡



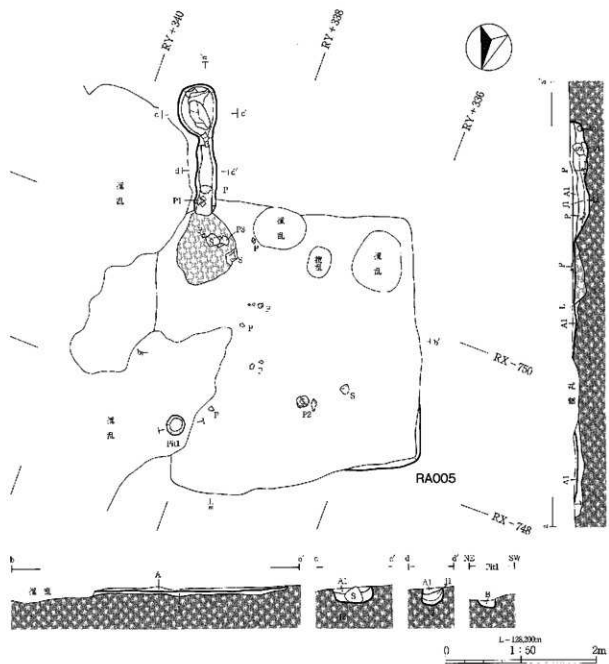
第5图 RA002豎穴住层跡



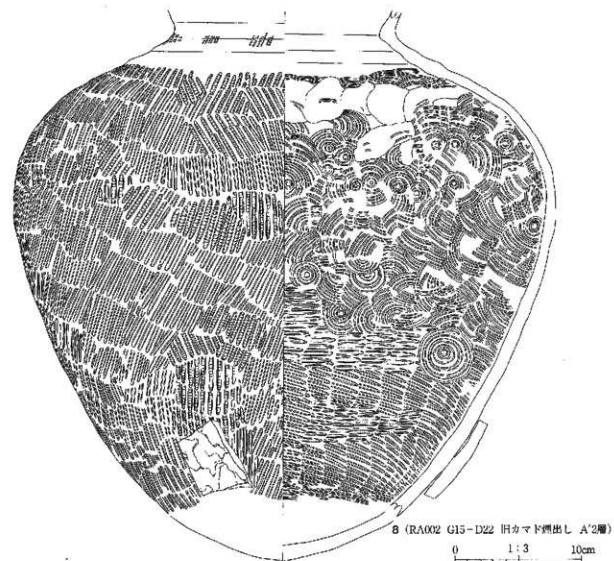
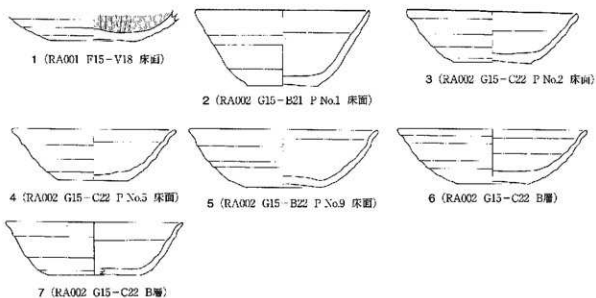
第6圖 RA003竪穴住居跡



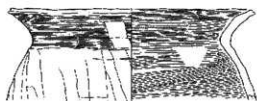
第7圖 RA004竪穴住居跡



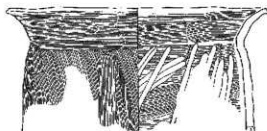
第8圖 RA005竪穴住居跡



第9図 RA001・002竪穴住居跡出土遺物



9 (RA002 G15-B21 B面)



10 (RA002 G15-C22 B面)



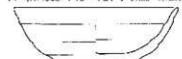
11 (RA003 F15-Y24 P No.9 表面)



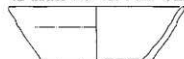
12 (RA003 F15-Y24 P No.7 表面)



13 (RA003 F15-X23 P No.13 表面)



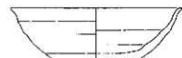
14 (RA003 F15-Y24 P No.6 床面)



15 (RA003 F15-Y25 掘出し)



16 (RA003 F15-Y24 P No.11 床面)



17 (RA003 F15-Y24 P No.8 床面)



18 (RA003 F15-Y24 P No.2 床面)



19 (RA003 F15-Y21 P No.1 表面)



20 (RA003 F15-Y24 P No.4 表面)



21 (RA003 F15-Y24 P No.10 床面)



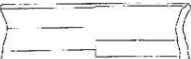
22 (RA003 F15-Y24 P No.5 床面)



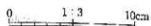
23 (RA003 F15-Y24 P No.3 床西)



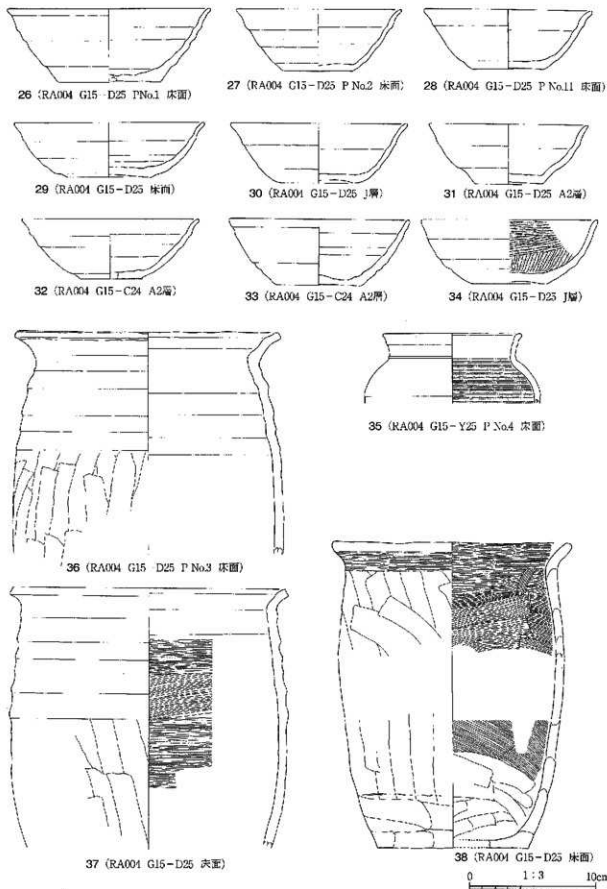
24 (RA003 F15-A24 P No.12 表面)



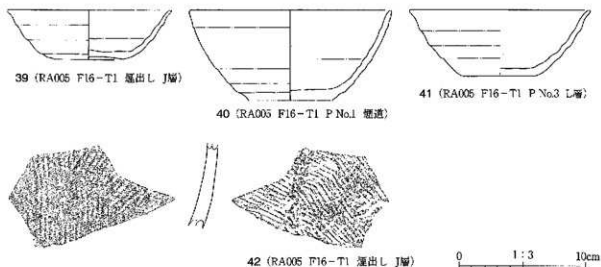
25 (RA003 F15-Y24 床面)



第10図 RA002・003竪穴住居跡出土遺物



第11圖 RA004竪穴住居跡出土遺物



第12図 RA005竪穴住居跡出土遺物

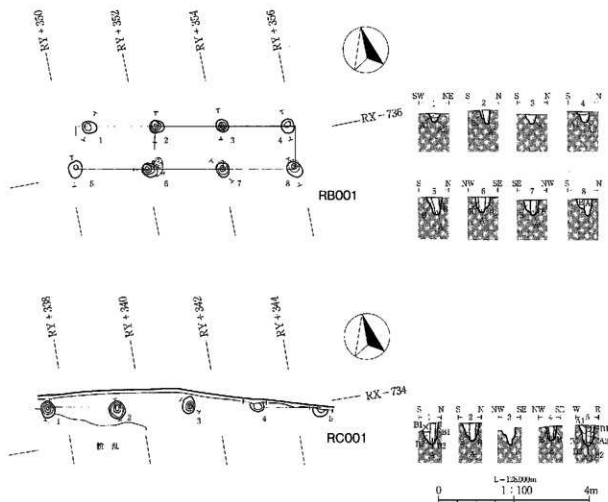
4. 江戸時代以降の遺構

RB001掘立柱礎物跡 (第13図)

- 位置 調査区北東 平面形 桁行3間・梁間1間の東西棟 重複関係 なし 掘込面 削平
 検出面 黄褐色シルト層上面 規模 南北3間(5.80m・19尺3寸)・東西1間(1.10m・3尺6寸)
 棟方向 P5とP8を通る柱筋でW10°S
 柱間寸法 桁行柱間は平均1.90m(6尺3寸)である。北側柱筋はP1・2間1.80m(5尺9寸)、P2・3間1.75m(5尺8寸)、P3・4間1.75m(5尺8寸)をはかる。南側柱筋はP5・6間1.90m(6尺3寸)、P6・7間1.97m(6尺5寸)、P7・8間1.90m(6尺3寸)をはかる。梁間柱間は1.10m(3尺6寸)である。
 柱穴 P1・3・4を除く柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.18~0.20m、掘方径は0.30~0.45mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡(A層)、掘方(B層)ともに黒~暗褐色土を主体とし、B層には黄褐色シルトが粒~塊状に混入する。各柱穴の深さは次の通りである。P1-0.22m、P2-0.35m、P3-0.23m、P4-0.25m、P5-0.44m、P6-0.38m、P7-0.38m、P8-0.43m。
 遺物 なし

RC001柱列跡 (第13図)

- 位置 調査区北西 規模 東西4間(7.20m・24尺) 重複関係 RA001を切る
 掘込面 削平 検出面 黄褐色シルト層上面
 柱間寸法 P1・2間1.85m(6尺1寸)、P2・3間1.90m(6尺3寸)、P3・4間1.90m(6尺3寸)、P4・5間1.75m(5尺8寸)をはかる。
 柱穴 P3を除く柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.12~0.15m、掘方径は0.25~0.45mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡(A層)、掘方(B層)ともに暗褐色土を主体とし、B層には黄褐色シルトが粒~塊状に混入する。各柱穴の深さは次の通りである。P1-0.53m、P2-0.46m、P3-0.45m、P4-0.38m、P5-0.54m。 遺物 なし



第13図 R B001掘立柱建物跡、R C001柱列跡

R D001土坑 (第14図)

- 位置 調査区西 平面形 不明 重複関係 なし 掘込面 削平
 検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端1.91m・下端1.79m、短軸上端0.54m・下端0.51m
 埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルト微量を含むA 1層、粒～塊状の褐色シルトを少量含むA 2層に細別される。いずれの層も多量の欝分を含む。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.19mをはかる。
 遺物 あかやき土器片、陶器片が出土している。

R D002土坑 (第14図)

- 位置 調査区西 平面形 不明 重複関係 R X001に切られる 掘込面 削平
 検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端0.78m、短軸上端0.41m・下端0.31m
 埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒状の明黄褐色シルトを含む層である。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.4mをはかる。
 遺物 あかやき土器・土師器片が出土している。

RD003土坑 (第14図)

位置 調査区西北 平面形 不明 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端1.13m・下端0.59m、短軸上端1.3m・下端0.54m
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒状の褐色シルト微量とカーボン少量を含むA1層、
粒~塊状の褐色シルト少量と粒状の灰黄褐色砂土を少量とカーボン少量を含むA2層に細別される。
壁の状態 外傾してゆるやかに立ち上がる。深さは0.32mをはかる。 遺物 なし

RD004土坑 (第14図)

位置 調査区北 平面形 不整長楕円形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端1.1m・下端0.94m、短軸上端0.82m、下端0.66m
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色シルトを主体とし、粒状の黄褐色シルトを少量含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.1mをはかる。 遺物 なし

RD005土坑 (第14図)

位置 調査区西北 平面形 不整長方形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端0.8m・下端0.58m、短軸上端0.56m・下端0.48m
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒状の褐色土を微量含むA1層、粒状の褐色土を少量と微量のカーボンを含むA2層に細別される。
壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.31mをはかる。 遺物 なし

RD006土坑 (第14図)

位置 調査区西北 平面形 長楕円形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端1.32m・下端1.12m、短軸上端0.94m・下端0.8m
埋土 人為堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒~塊状の明黄褐色シルトを多量に含む。
壁の状態 直立きみに立ち上がる。深さは0.29mをはかる。 遺物 なし

RD007土坑 (第14図)

位置 調査区西北 平面形 楕円形 重複関係 Pit165に切られる 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端0.72m・下端0.68m、短軸上端0.5m、下端0.39m
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを微量とカーボン少量を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.09mをはかる。 遺物 なし

RD008土坑 (第14図)

位置 調査区西中央 平面形 円形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端0.61m・下端0.37m、短軸上端0.5m・下端0.34m
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に、黄褐色シルトを含む層である。A1層は粒状に微量含む、A2層は粒状に多量含む。
壁の状態 外傾して緩やかに立ち上がる。深さは0.16mをはかる。 遺物 なし

R D009土坑 (第14図)

- 位 置 調査区西東 平面形 長方形
重複関係 Pit40・Pit42に切られ、Pit41を切る
掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規 模 長軸上端1.9m・下端1.81m、短軸上端0.73m・下端0.65m
埋 土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒状の暗褐色シルトを微量含むA1層と、粒状の黄褐色シルトを少量含むA2層に細分される。
床の状態 床面はほぼ平坦で構築土が認められる。構築土(L層)は黒色土を主体に塊状の明黄褐色シルトを多量含み、厚さは0.04~0.1mである。
壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.21mをはかる。 遺 物 磁器片が出土している。

R D010土坑 (第15図)

- 位 置 調査区西東 平面形 不整形円形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規 模 長軸上端1.16m・下端0.87m、短軸上端0.81m・下端0.61m
埋 土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒~塊状の褐色シルトを多量含むA1層、微量含むA2層、少量含むA3層に細別される。
壁の状態 外傾してゆるやかに立ち上がる。深さは0.3mをはかる。
遺 物 鉄釘が出土している。

R D011土坑 (第15図)

- 位 置 調査区西東 平面形 不整形円形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規 模 長軸上端1.05m・下端0.88m、短軸上端0.59m、下端0.39m
埋 土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし粒状の黄褐色シルトを微量含むA1層と、黄褐色シルトを主体とし粒状の黒褐色土を少量含むA2層に細分される。
壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.12mをはかる。 遺 物 なし

R D012土坑 (第15図)

- 位 置 調査区東 平面形 不整形 重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規 模 長軸上端2.78m・下端2.6m、短軸上端0.67m・下端0.49m
埋 土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルト少量と粒状の焼土を少量、層状のカーボン少量を含む。
壁の状態 後世の削平により不明。深さは0.09mをはかる。
遺 物 あかやき土器片が出土している。

R D013土坑 (第15図)

- 位 置 調査区東 平面形 長楕円形 重複関係 Pit234に切られる 掘込面 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 規 模 長軸上端2.13m・下端1.85m、短軸上端0.85m・下端0.6m
埋 土 人為堆積によるものである。A~C層に大別される。

A層—黒褐色土を主体とする層で、塊状の明黄褐色シルトを微量、塊状の焼土を多量、少量のカーボンを含む。

B層—カーボンを主体とする層で、塊状の黒褐色シルトを少量、粒状の焼土を微量含む。

C層—黒褐色土を主体とする層で、塊状の明黄褐色土を少量と、多量の焼土粒、微量のカーボンを含む。

壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.23mをはかる。 遺物 なし

R D014土坑 (第15図)

位置 調査区東 平面形 長楕円形 重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端1.74m・下端1.56m、短軸上端0.57m・下端0.45m

埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを微量と焼土を多量、カーボンを少量に含む。

壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.08mをはかる。 遺物 なし

R D015土坑 (第15図)

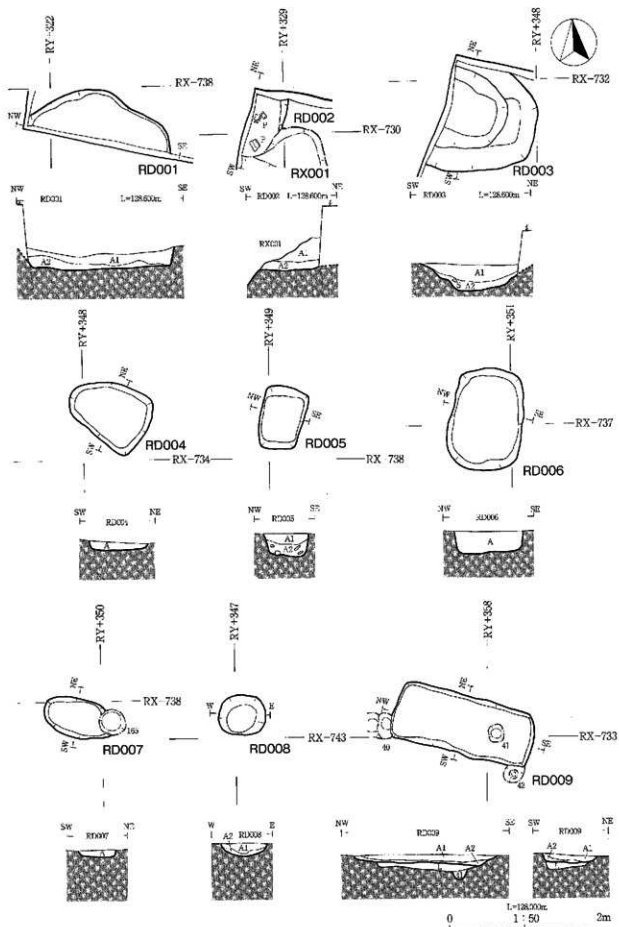
位置 調査区東 平面形 不明 重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 黄褐色シルト層上面 規模 長軸上端1.87m・下端1.35m、短軸上端0.61m、下端0.47m

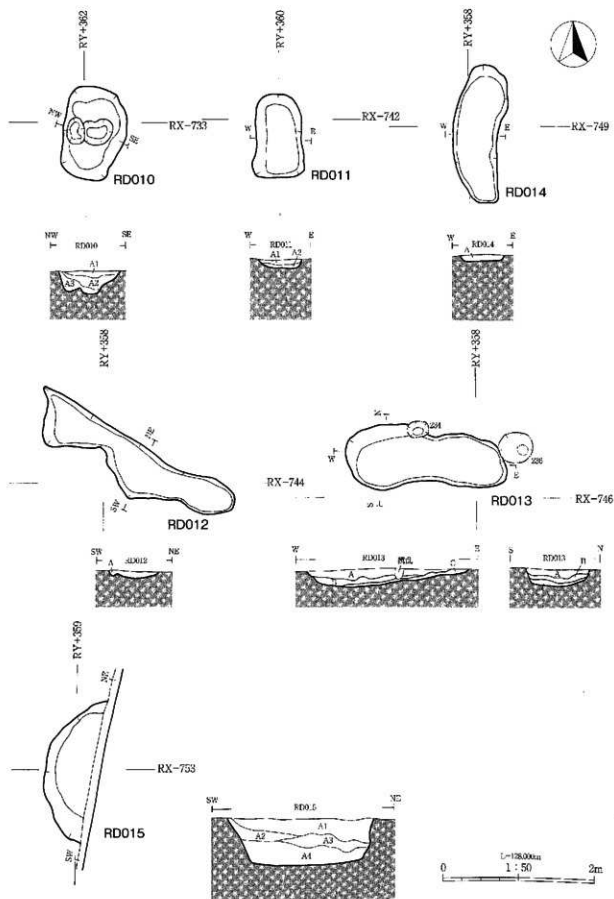
埋土 人為堆積によるものである。黒褐色土を主体に、黄褐色シルトを含む層である。A1・A2層は粒状に微量、A3層は粒状に少量、A4層は粒状に多量含む。

壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.6mをはかる。

遺物 縄文時代のフレイクと、須臾器・土師器片が出土している。



第14圖 R D001·002·003·004·005·006·007·008·009土坑



第15圖 RD010-011-012-013-014-015土坑

RG001溝跡 (第16図)

位置 調査区南側 平面形 逆L字状に東西に延びる 重複関係 RG004に切られる。
規模 検出した長さは18.4m、幅は上端0.7～0.3m・下端0.2～0.1mをはかる。
掘込面 削平 検出面 黄褐色シルト層上面
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に粒状の暗褐色シルトを含む層で、2層に層分けされる。
壁の状態 外傾して緩やかに立ち上がる。深さは0.3mをはかる。
遺物 縄文時代のフレイク、陶器・磁器片が出土している。

RG002溝跡 (第17図)

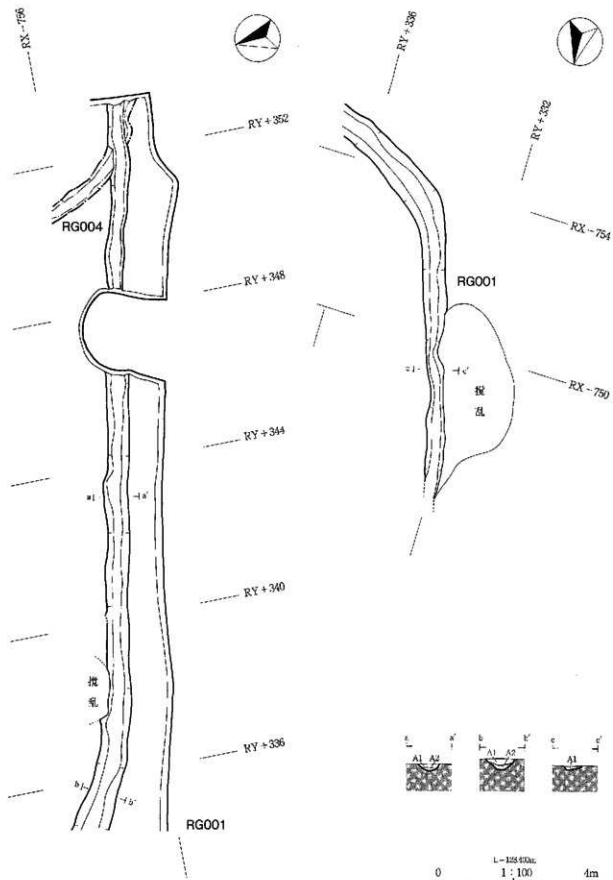
位置 調査区中央部 平面形 直線状に東西に延びる。 重複関係 RA003を切る。
規模 検出した長さは3.4m、幅は上端0.5～0.35m・下端0.3～0.2mをはかる。
掘込面 削平 検出面 黄褐色シルト層上面
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒状の橙色シルトを微量、グライ化土を含む。
壁の状態 ほとんどが削平され不明。検出された深さは0.05mをはかる。 遺物 なし

RG003溝跡 (第17図)

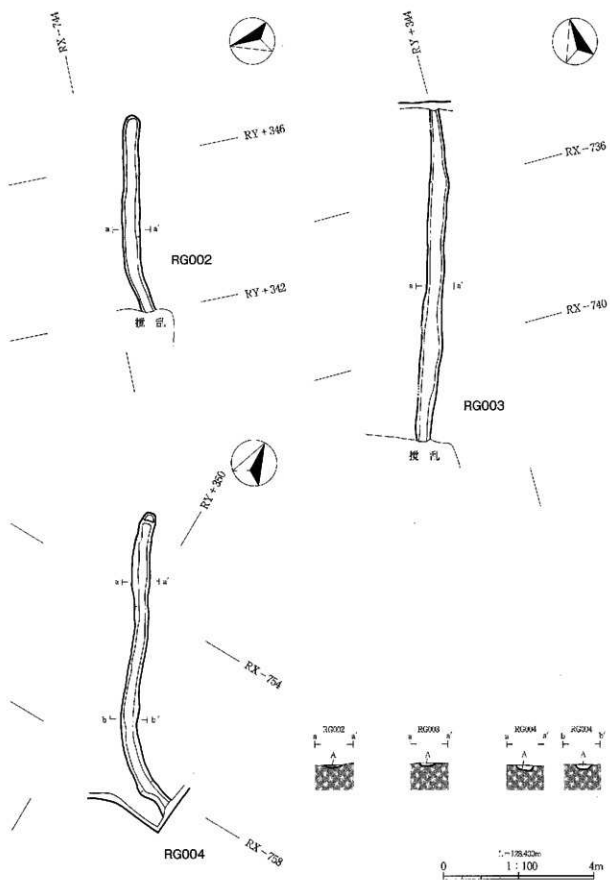
位置 調査区北側中央部 平面形 直線状に南北に延びる。 重複関係 なし
規模 検出した長さは8.6m、幅は上端0.6～0.25m・下端0.4～0.1mをはかる。
掘込面 削平 検出面 黄褐色シルト層上面
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒～塊状の褐色シルトと黄褐色シルトを少量含む。
壁の状態 ほとんどが削平され不明。検出された深さは0.1mをはかる。 遺物 なし

RG004溝跡 (第17図)

位置 調査区南東部 平面形 直線状に北西-南東に延びる。 重複関係 RG001を切る。
規模 検出した長さは7.9m、幅は上端0.5～0.3m・下端0.3～0.1mをはかる。
掘込面 削平 検出面 黄褐色シルト層上面
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体とし、粒～塊状の褐色シルトと黄褐色シルトを少量含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる。検出された深さは0.15mをはかる。
遺物 砥石 (第19図10)のほか、縄文時代のUフレ、磁器片が出土している。



第16図 R G 001溝跡



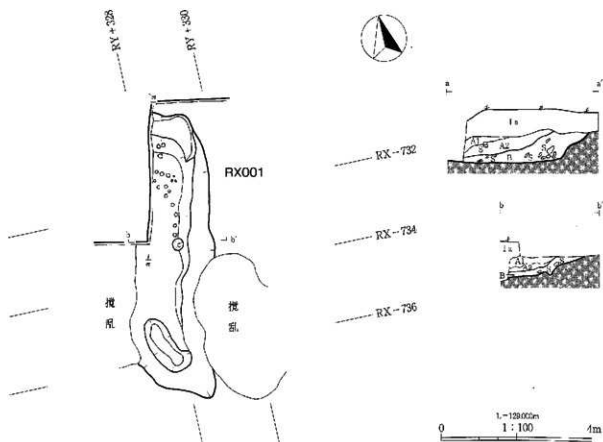
第17圖 R G 002·003·004溝跡

RX001池状遺構 (第18図)

位置	調査区北西部	平面形	不整楕円形か	重複関係	RD002を切る
規模	長軸上端7.45m・下端5.64m、短軸上端2.25m以上、下端1.25m以上				
掘込面	削平 検出面 黄褐色シルト層上面				
埋土	自然堆積によるものである。2層に大別され、A層は黄褐色シルトを主体とし、塊状の黒褐色土を少量含む。B層は黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを微量に含む。				
床の状態	壁の下端にそって直径0.05～0.1mの木杭が0.2～0.3mの間隔で打ち込まれている。				
壁の状態	外傾して緩やかに立ち上がる。検出された深さは0.10～0.55mをはかり、南から北に向かって深くなる。				
遺物	B層より、占鏡(第19図6・7)、煙管(第19図1・2)が出土している。				

5. 溝跡、池状遺構、遺構外出土遺物

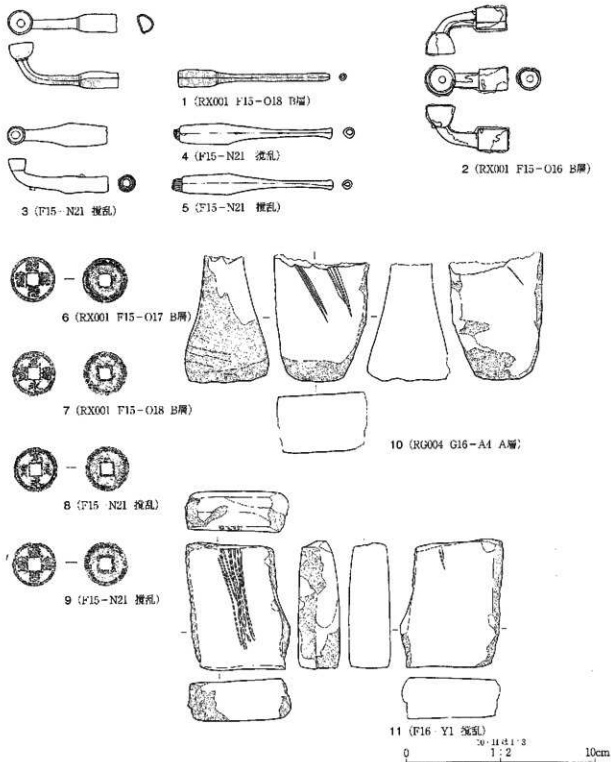
煙管(第19図1～5) 1～5はすべて銅製の罫字煙管であり、3～5には罫字が残存している。1は首部と肩部、吸口と肩部との段差がやや滑らかであるが、境目は2本の沈線でごく区切られる。火皿は大型で、付け根の補強帯が顕著にみられ、脂返しの湾曲が大きい。一部、剥落しているが製作当時は、全体を金で鍍金されていたと考えられる。2は錆に覆われている。火皿は大型で、首部の長さが短く、肩部の段差が顕著にみられる。成形時の華ぎ目が裏側にある。3は火皿が小型化し、脂返しの湾曲も小さく、肩部に膨らみを持つ。4・5は吸口部分のみ残存するが、肩部が顕著に膨らむ。



第18図 RX001池状遺構

古 銭 (第19図6~9) 6は北宋の明道元寶である。7・8は銅一文銭で、7は古寛永通寶、8は背文字のみられない新寛永通寶である。9は北宋の熙寧元寶である。

石 製 品 (第19図10・11) いずれも砥石である。10は3面を使用しており、上部を欠損している。11は扁平な形状で、5面を使用している。



第19図 R X001池状遺構、R G004溝跡、遺構外出土遺物

ビット群(第20図) 第1次調査区内では297口のビットが検出されている。根土は黒褐色土が主体となるものが多い。

以下は、各ビットの深さをまとめた一覧表である。

No	深さ(m)	No	深さ(m)	No	深さ(m)	No	深さ(m)	No	深さ(m)	No	深さ(m)
1	0.31	51	0.34	101	0.12	151	0.12	201	0.42	251	0.32
2	0.14	52	0.58	102	0.45	152	0.23	202	0.28	252	0.19
3	0.26	53	0.24	103	0.24	153	0.2	203	0.36	253	0.2
4	0.32	54	0.25	104	0.17	154	0.17	204	0.27	254	0.37
5	0.27	55	0.34	105	0.18	155	0.16	205	0.36	255	0.11
6	0.27	56	0.32	106	0.34	156	0.17	206	0.14	256	0.27
7	0.21	57	0.17	107	0.28	157	0.23	207	0.22	257	0.27
8	0.36	58	0.29	108	0.09	158	0.19	208	0.25	258	0.22
9	0.32	59	0.2	109	0.13	159	0.16	209	0.22	259	0.35
10	0.51	60	0.33	110	0.24	160	0.22	210	0.12	260	0.26
11	0.34	61	0.18	111	0.22	161	0.14	211	0.13	261	0.2
12	0.34	62	0.47	112	0.34	162	0.2	212	0.15	262	0.18
13	0.27	63	0.37	113	0.44	163	0.14	213	0.18	263	0.19
14	0.3	64	0.27	114	0.25	164	0.16	214	0.13	264	0.33
15	0.45	65	0.2	115	0.29	165	0.19	215	0.18	265	0.11
16	0.27	66	0.41	116	0.24	166	0.16	216	0.27	266	0.42
17	0.37	67	0.16	117	0.41	167	0.26	217	0.27	267	0.11
18	0.4	68	0.33	118	0.36	168	0.13	218	0.14	268	0.13
19	0.5	69	0.42	119	0.5	169	0.4	219	0.31	269	0.12
20	0.13	70	0.45	120	0.34	170	0.19	220	0.13	270	0.22
21	0.37	71	0.19	121	0.3	171	0.39	221	0.29	271	0.17
22	0.16	72	0.17	122	0.29	172	0.2	222	0.21	272	0.21
23	0.43	73	0.43	123	0.3	173	0.22	223	0.2	273	0.15
24	0.4	74	0.38	124	0.38	174	0.37	224	0.17	274	0.09
25	0.37	75	0.49	125	0.47	175	0.36	225	0.21	275	0.23
26	0.23	76	0.3	126	0.32	176	0.2	226	0.3	276	0.27
27	0.25	77	0.18	127	0.39	177	0.27	227	0.33	277	0.19
28	0.21	78	0.3	128	0.4	178	0.23	228	0.4	278	0.1
29	0.34	79	0.47	129	0.2	179	0.27	229	0.29	279	0.23
30	0.14	80	0.25	130	0.13	180	0.29	230	0.29	280	0.26
31	0.65	81	0.46	131	0.16	181	0.38	231	0.13	281	0.2
32	0.33	82	0.39	132	0.3	182	0.17	232	0.13	282	0.2
33	0.27	83	0.34	133	0.22	183	0.26	233	0.23	283	0.3
34	0.42	84	0.34	134	0.27	184	0.2	234	0.26	284	0.27
35	0.42	85	0.25	135	0.14	185	0.2	235	0.32	285	0.29
36	0.36	86	0.29	136	0.21	186	0.3	236	0.23	286	0.26
37	0.12	87	0.42	137	0.19	187	0.22	237	0.32	287	0.14
38	0.27	88	0.46	138	0.33	188	0.23	238	0.22	288	0.28
39	0.26	89	0.45	139	0.2	189	0.33	239	0.24	289	0.12
40	0.15	90	0.37	140	0.19	190	0.26	240	0.39	290	0.22
41	0.11	91	0.42	141	0.27	191	0.16	241	0.35	291	0.17
42	0.44	92	0.29	142	0.13	192	0.17	242	0.1	292	0.27
43	0.35	93	0.34	143	0.2	193	0.13	243	0.21	293	0.25
44	0.64	94	0.27	144	0.16	194	0.13	244	0.33	294	0.18
45	0.44	95	0.25	145	0.15	195	0.28	245	0.18	295	0.13
46	0.63	96	0.25	146	0.25	196	0.22	246	0.17	296	0.16
47	0.33	97	0.28	147	0.19	197	0.19	247	0.18	297	0.13
48	0.31	98	0.34	148	0.25	198	0.23	248	0.25	298	
49	0.39	99	0.32	149	0.23	199	0.22	249	0.09	299	
50	0.54	100	0.34	150	0.31	200	0.22	250	0.17	300	

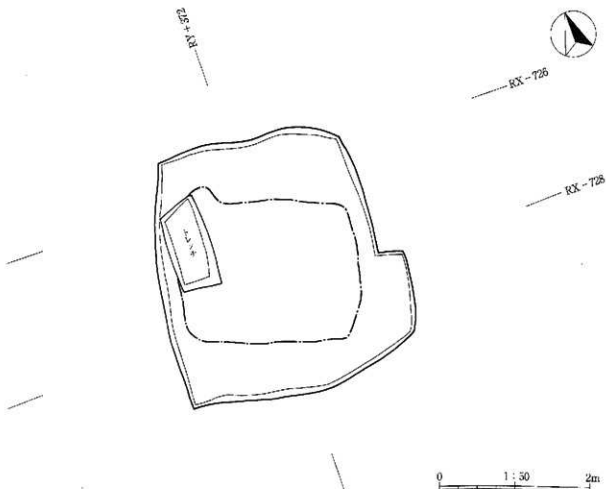
第1表 第1次調査区ビット計測表

6. 礫石経塚

調査経緯 礫石経塚は前述したとおり、調査予定区内に建立されていた忠霊塔を、山門脇に移設する際の立会調査で偶然発見された遺構である。一般的に礫石経塚を造立した場合、盛土によるマウンド、あるいは経碑等の地上標識が存在するが、この経塚の地上標識は失われており、地下の主体部「坑」のみが残存していた。寺の記録・伝承等にも伝えられておらず、全く未発見の経塚であった。長善寺境内で発見された経塚であるので「長善寺経塚」として新たに遺跡台帳に登録した。経塚は現在、忠霊塔の基礎部分が遺構検出面まで及ばないため、平面プランの検出と深掘りしてしまったトレンチの精査をし、完備せずに現地保存として埋め戻してある。

規模 経塚主体部土坑の規模は、約2.4m×約1.8mの長方形で深さは0.4～0.5mをはかる。塚土はしまりのない暗褐色土が若干混入しているが、ほとんどは経石によって埋め尽くされている。

経石 (第22図1～21) 経石はトレンチ内より数百点出土しているが、その中で墨書がはっきりしている21点のみ参考資料として取り上げた。すべて、一面に一字を書写した一字一行経である。1は「法」、2は「経」、3は「第」、4は「是」、5は「聞」、6は「衆」、7は「諸」、8は「耶」、9は「所」、10は「爲」、11は「以」、12は「天」、13は「白」、14は「者」、15は「令」、16は「縁」、17は「空」、18は「然」、19は「前」、20は「像」、21は「愚」である。



第21図 長善寺経塚平面図



第22圖 長善寺経塚出土一字一石経

Ⅲ. 総括

館野前遺跡第1次調査では、平安時代の堅穴住居跡5棟、近世の礎石経塚1基、掘立柱建物跡1棟、柱列跡1基、土坑15基、溝跡4条、池状遺構1基、柱穴297門を確認した。

堅穴住居跡 平安時代の堅穴住居跡は、いずれの住居跡もカマド基底部は残存しておらず、住居廃棄の際に解体されたものと考えられる。RA002・003・005の遺道内には、須恵器大甕や坏などが意図的に廃棄されており、住居廃棄時の祭祀行為に関わるものと考えられる。RA002出土の須恵器人甕の体部には、別の須恵器片が溶着していた。館野前遺跡周辺には、須恵器生産に適した粘土が採取できる場所があり、この須恵器大甕を生産した窯が近くに存在する可能性がある。

掘立柱建物跡・柱列跡 柱穴は調査区北東部に数多く検出されたが、掘立柱建物跡として検出できたのはRB001のみである。RC001も北側に向かって柱穴が並んでいれば、掘立柱建物跡になる可能性もある。

土 坑 土坑のタイプは多岐にわたり、側々の用途は異なっていると考えられる。RD012～014の埋土には多量の焼土が含まれており、火を使用した用途が考えられるが、遺物が出上していないため詳細は不明である。

溝 跡 溝跡はRG001を除き、いずれも掘り込みが浅く長さも短いものである。RG001は延伸長が長く、その位置関係から後述するRX001池状遺構との関連性が高いと考えられる。

池状遺構 RX001の底面はグライ化し、鉄分が多く含まれていることから、一定期間、水が溜まっていたことが推測される。埋土は大きく上層、下層に分けられ、下層はヘドロ状の土が徐々に堆積したもので、上層は水の氾濫によって短時間で堆積した層と考えられる。上層の埋土はRG001溝跡の埋土に類似しており、溝跡の伸びる方向とRX001の位置関係から、現在は埋平されているが当時は繋がっていた可能性が高い。遺構底面より出土した樹皮は、火風補強帯が顕著で脾返しに屈曲が強く肩付がある形態から17世紀後半～18世紀前半ころと考えられ、遺構の年代もそれに近いものと考えられる。

経塚・経石 経塚は経碑・壺土などの地上標識が残存していないが、地表下の主体部土坑より、大量の一字一石経が確認された。経石に書写された文字を「大正新脩大藏經」テキストデータベースで検索したところ、すべて妙法蓮華経の中に含まれている文字であった。礎石経塚に納められる経典の中で、最も使用頻度が高い経典は「妙法蓮華経」であることから、本経塚の経典も妙法蓮華経である可能性が高い。妙法蓮華経の文字総数は69,384字であるが、本経塚に納められた経石の数もそれに相当すると考えられる。

埋土の目的 経塚造営は平安時代後期から始まるが、当初の目的は末法思想に基づき、後世に経典を残すことであり、経典も紙本経が主であった。中世以降、末法思想は薄れ、廻經の意味・目的は変化し、経典の媒体も紙本経から礎石経へと変わってゆく。近世の経塚造営の目的は専ら、先祖供養・子孫繁栄・五穀豊穡・村内安全などの現世利便的な性格が強くなる。本経塚の場合は、経碑が残されていないため造立の目的・供養者・年月日は不明であるが、長善寺の開山は戦国時代末期と伝えられており、一字一石経が盛行する時期から推測すると江戸時代のある時期と考えられよう。経塚の造立は、当時の長善寺の僧侶が主体的に執り行ったと考えられるが、村の住人も様々な形で関わったと考えられる。経塚の造立は仏との結びつき（結縁）だけではなく、共同体としての結びつきを深める側面もあったと推測される。

今回の経塚の発見は土敷岡地区周辺の歴史を考える上で重要な資料になるとともに、県内の仏教史を研究する上で貴重な成果となると言えよう。

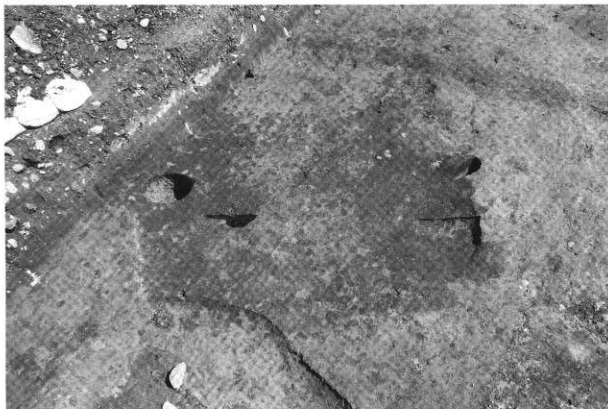
写 真 图 版



調査区全景1 (北から)



調査区全景2 (東から)



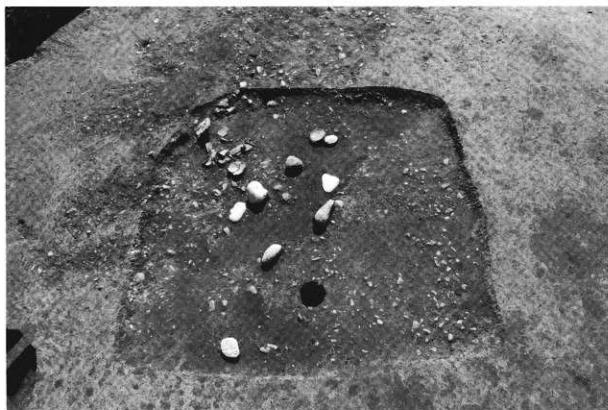
R A 001 豎穴住居跡



R A 002 豎穴住居跡



R A 003竪穴住居跡



R A 004竪穴住居跡

第4図版



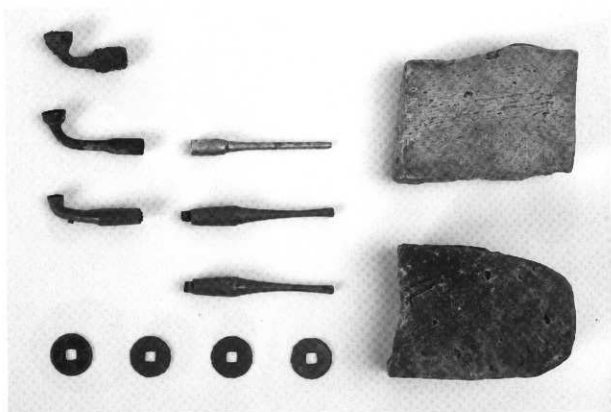
R A 005 罅穴住居跡



R X 001 池状遺構



館野前遺跡出土 土器群



館野前遺跡出土 煙管・古銭・砥石



長善寺経塚全景（南より）



長善寺経塚出土 一字一石經

報告書抄録

ふりがな	たてのまえいせき							
書名	館野前遺跡							
副書名	寺院建設に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	佐々木亮二							
編集機関	盛岡市 遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 TEL019-635-6600							
発行機関	盛岡市教育委員会、宗教法人長善寺							
発行年月日	2011年8月10日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たてのまえいせき 館野前遺跡	岩手県盛岡市 上飯岡15地割 地内	3201		39° 40° 08°	141° 06° 16°	第1次 2011.08.02～ 2011.08.06 2011.09.01～ 2011.10.29	924	寺院建築
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
館野前遺跡 (第1次調査)	集落跡	平安時代 江戸時代	竪穴住居跡	5	土師器・須恵器	平安時代の集落跡と、江戸時代の一字一石塚が確認された。		
			経塚	1	経石(一字・石経)			
			獨立柱建物跡	1	陶磁器			
			柱列跡	1	土師器			
			土坑	15	土師器			
			溝跡	4	古銭			
			池状遺構	1	磁石			
			柱穴	297				
要約	長善寺の境内の一角より、一字一石経塚を発見した。遺構面より下に掘削が及ばないことから、平面形のみ精査し、現地保存とした。 また、平安時代の集落跡が確認され、これまで未調査であった遺跡の内容が判明した。							

館野前遺跡

—寺院建築に伴う緊急発掘調査報告書—
2011年 8月10日 発行

- 編 集 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 盛岡市本宮字荒屋13番地1
In019-635-6600
- 発 行 宗教法人長善寺 盛岡市教育委員会
- 印 刷 株式会社 社殿印刷
〒020-0122 盛岡市みたけ2丁目22-50
In019-641-8000
-